SON-DAY, JULY 25th, 2010 MORNING WORSHIP SERVICE

単立キリスト教会 マラナサ・グレイス・フェローシップ Maranatha Grace Fellowship [MGF] Since Jan. 18, 2004

牧仕: 菊地 一徳 (かずなり) 教会所在地: 〒381-0084 長野市若槻東条 541-2 フカサビル2F 長野キリストセンター内

www.mgf-jc.com mgfchurch@ybb.ne.jp / 電話、郵便物は菊地宅まで 〒381-2247 長野市青木島 1-32-17 電/Fax:026-285-4713

礼拝黙想 Meditating on Worship

A 【多神教・偶像礼拝の実態】

「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは、神を知っているながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました」(ロマ1:20~23)。

偶像礼拝者は、唯一まことの創造主なる神を認めたくない、信じたくないので、自分に都合のよい、理想の神にすりかえる。このように偶像礼拝は、天地創造の唯一まことの神をあたかも被造物であるかのように格下げすることに他ならない。偶像とは、まことの神の模造品、偽造品、不法コピーである。かつてマルチン・ルターは、「人間は常に神か、さもないければ偶像を持つ」と言ったが、無神論者でも何らかの偶像(理想像)を持って生きている。偶像の「偶」は「人」+「禺」でできており、「禺」は上部が頭、下部は尻尾がある人を真似る猿を表す象形文字である。

偶像とは、まさに神の猿真似である。また、「像」は「人」+「象(かたどる)」からできており、人に象った肖像を意味する。偶像のギリシャ語は、「エイドーロン」(影像)で、「オイダ」(知る、理解する、認める)という動詞から派生した名詞。偶像が知る目的で作られたことを暗示する言葉であるが、知るつもりが逆になることを困難していることは全くの皮肉である。このエイドーロンから、ラテン語の「イドルム」(イドラ)が生じ、英語の「アイドル」(偶像、崇拜される人や物、人気者)という言葉が生まれた。人間は自分勝手なイメージに神(理想像)を作る。そして作られた物(作品)が作った者(作者)よりも偉くなるという不条理を受け

入れている。

日本人の多くは、神や信仰は様々あるが、行き着く所はみな同じだから何でもよい(万教同根)、と考える。ところが、子供にとって親はどここの親も同じだから、誰に養育されようと変わりない、とは誰も考えない。同様に多神教も全くナンセンスな話なのだ。「八百万の神」は4つに分類される。①「精霊信仰」(アニミズム信仰) = 自然を対象としたもの。超自然的な気配を感じたらみな神にしてしまう。変わった形をした奇岩、何か住んでそうな洞窟、樹齢何千年の大木。とにかく不思議なもの、変わったものには、しめ縄をはり、神棚をもうける。しかし、やがて滅び失せるもの。②「死んだ人をまつた神」=「明治神宮」は明治天皇、「天満宮」は菅原道真、「神田明神」は平将門、「八幡宮」は応神天皇、あるいは源義家。「芸能神社」= 神話の時代から現代に至るまでの芸能人を700人選んだ。③「物を神とする」= 石、木、金属で作った像、紙、ステッカー、プラスチックで作ったお札やお守り等。燃えてしまう、壊れる、破れる、なくすもの。ちなみに住職を対象としたアンケート調査によると、寺院で出している交通安全のお守りは、8割の住職は信じていないという。また半分は気休めになる、3割は全く信じないという結果が出たようだ。④「動物を神とする」=「稲荷神社」は狐、「金毘羅神社」はワニ(梵語クンピーラ→こんぴら)を神とする。その他、蛇、狸、犬、馬、牛、鹿等、大抵の動物には神になれる素質があるようだ。実は、進化論者も「原始人は動物を礼拝していた。なぜなら人間は動物に造られたからだ」と主張して偶像礼拝の由来を説明する。

聖書には偶像の正体が暴露されている(エレ10:2~5; イザ40:18~20; 44:9~20; 詩115:4~8; 使17:29)。これらの箇所を通して偶像とは文字通り「木偶(でく)」であり、それを信奉する者も「でくのぼう」と成り下がると教えている。偶像礼拝はアイドル崇拜と同じで、

ファンはアイドルを真似る。不滅ではない偶像、介護を必要とする偶像を礼拝する者も空しいことにそれと全く同じ運命を辿る。

全知全能の神は唯一であることは実に条理にかなっていることだ。なぜなら全知全能の神が複数存在すること自体、矛盾するからだ。神が複数存在するならば、それらの神々は全知全能ではあり得ない。全知全能でないから、他の神々が必要なのだ。他の神々を圧倒できず、並立を認めている神々、交通安全の神、学問の神、家内安全、商売繁盛、無病息災の神など専門分野に分かれている神々は、全知全能ではない。多神教にオールマイティーの神はいないのだ。偶像礼拝は不条理で、唯一まことの創造主を礼拝することは条理にかなったことである。「人が神を知らないことは悪いことであるが、何よりも悪いことは、神にあらざるものを、神と認めることである」(アフリカの弁辞学者ラクティンティウス)。十誡の第二誡「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない」(出20:4)とは、人間にとって条理にかなった健全な生き方を示すものである。人間は神のかたち(イメージ)に造られた(創1:27)。それは神を礼拝する者として造られたことを意味する。神を礼拝する者は神に似た者となる。即ち、受肉された神イエス・キリストのようになれるのだ(コロ1:15; ヘブ1:3; ロマ8:28)。イエス・キリストこそが神のイメージであり、私たちが真似るべき理想像である。

【多神教の矛盾と愚かしさ】

「イエス・キリストだけが救い主、唯一の神と信じるキリスト教が世界の平和を乱している」。「キリスト教は排他的、非寛容的、好戦的、独善的で、自分たちを絶対視する傲慢な宗教だ」。これらはキリスト教を受け入れたくない人々の詭弁である。彼らにとって聖書の神は

「教会【マラナサ・グレイス・フェローシップ(略称:MGF)】はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです」(エペソ1:23)。「そしてあなたがた【MGF】は、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです」(コロサイ2:10)。

都合が悪いというだけのことだ。戦争の原因は宗教にあるから平和共存のため、宗教を一致させようとする動き(エキュメニカル運動)は、一見論理的に思える。日本人の「和をもって貴し」とする精神に通じるので響きもいい。平和共存は、宗教の一致によって実現される(神々の共存)という考え方は「多神論」(宗教多元論)とも呼ばれる。しかし、この多神論にはいくつかの大きな問題がある。

①多神論は、人間主義(ヒューマニズム)の所産であり、平和共存という目的のために人間の知恵が生み出した神観に過ぎない。神々も人間の方が優位にあり、人間が神々を采配する。神に人間が従うのではなく、神々を人間の目的に従わせようとする。そこにあるのは、人間の都合に合わせて操作される弱々しい神々、共存のために人間の仲裁を必要とする絶対性のない神々である。多神論に立つ人々は神の絶対性は勿論、神の論理や神の定める基準を受け入れない。人間の定める基準に合わない神は認められないので、神々はそれに適合するように合理化されていく。多神論の神々は人間によって作り出されたものだ。

②多神論は、極端に言えば、真理はどうでもいい、共存・和が大切であるという考え方である。真理が何であるかより、とにかく和をつくることを第一とする。いわば和こそ真理であり絶対なのだ。正論でも和を乱すなら、それは退けられる。1+1の答えが2であるか、11であるかは重要ではない。仮に11ということでも全員が納得して受け入れられるなら、11が答え(和)なのだ。2が正答でも、それで全員が一致できないなら誤答とされる。真理が何であるかはもはや問題にされず、争いを避けるためにいかに譲歩して妥協点に達するかが第一とされる。このように、「神々の共存」「和」のために真理を譲歩させるのが、多神論の立場である。それはまさに真理の放棄。神(真理)を絶対視せず、和を絶対視するのだ。神の絶対性を拒絶しながら、神々の共存を絶対化するのには矛盾している。

③多神論もある意味「和」という「絶対的真理」

を主張するイデオロギー(思想、観念、信条体系)である。そして、和・共存を押し付ける。一神論が排他的であるというなら、和を絶対視する多神論も排他的である。実際、日本のような多神論社会では、みんなと同じようにしない者は認められず、排除される。実は日本のいじめの論理は多神論的なのだ。全員が1+1=11で一致しているところへ、いや正答は2だと言いきるなら、村八分される。このように多神論は必ずしも寛容ではない。

④一神教民族は好戦的で多神教民族は平和的などと日本ではよく言われるが、全く根拠のないでまかせである。歴史上の帝国の殆どは、多神教民族の帝国(バビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマ、モンゴル帝国等)。日本人は十字軍や西欧列国の帝国主義ばかり取沙汰するが、歴史上の侵略戦争の殆どが多神教民族によるもの。多神教民族の日本は平和的だろうか？そう思い込んでいるのは日本人だけでアジアから見れば恐ろしく好戦的(大日本帝国、神国日本、大東亜共栄圏、聖戦思想)である。キリシタン迫害の急先鋒は僧侶や神主であった。一神教=好戦的、多神教=平和的という図式は成立しない。

⑤多神論的寛容さは、むしろ21世紀の文明を内部から腐敗させ、崩壊させることになる。なぜなら、多神論は罪を問題にしないからだ。和の前に罪は無視される。しかし、罪の原理は無視されようと現実に働いており、やがて必ず力を発揮し、人間を破壊する。和のゆえに真理と正義を排除し、本物も偽物も、聖なるものも汚れたものも区別せず、清濁合わせて飲む社会が退廃していくのは歴史が示すところだ。士師記の墮落と混乱の時代もかりである。「めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた」(21:25)。仮に多神論的寛容のおかげで表立った対立や争いは軽減したとしても、正義のない腐敗した社会の平和と繁栄が長続きするはずがない。真理のなしの和は、人間の心も社会も歪ませ、崩壊させる。

⑥一神教にとって、多神論は一種の無神

論である。多神論は不完全な神々の存在は認めても、全知全能の神の存在は否定するからだ。全知全能にして永遠なる神が複数存在するということはあり得ない。また完全なる神は下位の神を必要としない。全知全能であるということは唯一であるということと同義。つまり、神が全能であれば神は唯一であり、神が複数存在するとすれば、その神々は不完全だということに他ならない。全知全能ではないから、他の神々を必要とする。他の神々を圧倒できず、並立を認めている神がどうして全能と言えるだろうか？交通安全の神様、学問の神様、家内安全、商売繁盛の神様など専門分野に分かれている神々は全知全能ではない。しかも、全知全能ではない不完全な神をいくつ集めても全知全能にはならないし、完全にもならない。また、多くの神々の中で全知全能なる神を1つでも認めれば、それは即唯一神教であり、多神教は成立しなくなってしまう。一神教は不完全な神を神とは認めない、不完全な神々を寄せ集めた宗教は無神論の一形態である。キリスト教の排他性(神の聖さと義)は、キリストの十字架によって示された寛容(神の愛)と表裏一体になっている。聖書は「神の義」だけを主張しているのではない。むしろ「神の愛」を語っている。義を確立した上での愛による赦し、これが聖書の真理である。神の愛は人種、民族、文化、宗教を越えているだけではなく、神を否定する人にまで差し伸べられている。

多神教はみな万教同根を説く。「大本(おおもと)」「立正佼成会」を始め、「宗教のデパート」と呼ばれる「生長の家」「世界救世教」「真光系諸教団」等の新興宗教はその際たるものである。しかし、これで彼らの教えがいかにナンセンスで愚かしいものであるのか、おわかりいただけたと思う。寄せ集めの新興宗教は所詮寄せ集めの集団を生み出すだけだ。

Ω

《お知らせ》

★8月14日(土) ユースのBBQ 午前10:30~ @MGF (※高校生以上の若者対象)

●8月29日(日) 午前礼拝 午前10:30~/昼食・交わり) 午後12:00~/夕礼拝 午後4:30~

「教会【マラナサ・グレイス・フェロシップ(略称:MGF)】はキリストのからだであり、いっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです」(エペソ1:23)。「そしてあなたがた【MGF】は、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです」(コロサイ2:10)。